白河夜船

吉本ばなな

白河夜船

吉本ばなな

吉本ばなな（よしもと　ばなな）
一九六四年、東京に生まれる。日本大学芸術学部文芸科卒。八七年、「キッチン」で第六回「海燕」新人文学賞を受賞。八八年、単行本『キッチン』が第一六回泉鏡花文学賞を、八九年、『キッチン』『うたかた／サンクチュアリ』が芸術選奨新人賞を、『TUGUMI』が第二回山本周五郎賞をそれぞれ受賞する。他に著書として『哀しい予感』がある。

白河夜船

一九八九年七月一〇日　第一刷印刷
一九八九年七月一五日　第一刷発行

著者　吉本ばなな
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒一〇二　電話（〇三）二二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

印刷・製本　大日本印刷

（落・乱丁本はお取替え致します）
（定価はカバーに表示してあります）

© B.Yoshimoto 1989
ISBN4-8288-2306-9 C0093
NDC913 194 216p

目次

白河夜船　5
夜と夜の旅人　91
ある体験　167

装丁 増子由美

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

白河夜船

白河夜船

いつから私はひとりでいる時、こんなに眠るようになったのだろう。

潮が満ちるように眠りは訪れる。もう、どうしようもない。その眠りは果てしなく深く、電話のベルも、外をゆく車の音も、私の耳には響かない。何もつらくはないし、淋しいわけでもない、そこにはただすとんとした眠りの世界があるだけだ。

目覚める瞬間だけが、ちょっと淋しい。薄曇りの空を見上げると、眠ってからもうずいぶんと時間がたってしまったのを知る。眠るつもりなんかなかったのに、1日を棒にふったなあ……とぼんやり思う。屈辱によく似たその重い後悔の中で私はふいにひやりとする。

いつから眠りに身をまかせるようになってしまったのだろう。いつから抵抗をやめた

のだろう……私が潑剌としていつもはっきり目覚めていたのはいつ頃なのだろう。それはあまりにはるかすぎて、太古のことのように思えた。シダや恐竜が荒々しく生き生きとした色で目にうつる、遠い昔のことのようにかすんだ画面としてしか思い出せなかった。

私はたとえ眠っていても、それでも恋人の電話だけはわかる。

岩永さんからの電話のベルは音がはっきりと違って聞こえる。なぜだか私にはどうしてもわかってしまうのだ。他のもろもろの音が外側から聞こえるのに対して、彼からの電話はまるでヘッドホンをしている時のように頭の内側に快く響く。そして私が起き上がって受話器を取ると、あの、ぎょっとするほど低い声で彼が私の名を呼ぶのだ。

「寺子?」

私がそう、と答えるその声のあまりの空ろさに彼は少し笑って、いつでも同じように、

「また寝てたんでしょう。」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

と言う。普段は全然敬語を交えないで話す彼がふいにそう言ってくれるその言い方があまりにも好きで、聞くたびに世界がふっと閉じるように思う。シャッターが降りてくるように盲目になる。その響きの余韻を永遠のように味わう。

「そう、寝てたわ。」

やっと意識がはっきりしてきて私は言う。この前、電話がかかってきたのは雨の夕方だった。どしゃ降りの雨音とずっしり重い空の色が街中を包んでいる中でその時ふいに、その電話だけが私と外界をつないでいるとてつもなく重要なラインに思えた。

彼の声が待ち合わせの時間と場所を告げはじめると、私はもうつまらなくなってしまう。そんなことよりも私の好きな「また寝てたんでしょう」をもういっぺんやってほしい、アンコールだ、と足で床を踏み鳴らすマネをしながらメモを取る。はい、何時ね。はい、あそこで。

もしも今、私達のやっていることを本物の恋だと誰かが保証してくれたら、私は安堵のあまりその人の足元にひざまずくだろう。そしてもしもそうでなければ、これが過ぎていってしまうことならば私はずっと今のまま眠りたいので、彼のベルをわからなくし

てほしい。私を今すぐひとりにしてほしい。

そんな不安に疲れた気持ちで、私は彼と出会って1年半目の夏を迎えていた。

「友達が死んだの。」

のひと言を言いそびれて2カ月になる。言えば彼は真剣に耳を傾けてくれることがわかっているのに、どうして言えずにいるのか自分でもよくわからない。

夜のなかで、いつも思案する。言おうか、今、言い始めようか。

私は歩きながら、言葉を捜す。

友達が死んだの。あなたは会ったことなかったわね。いちばん仲良しだった女の子、しおりっていうの。大学を出てから、ものすごく変わった仕事をしていた。うーんとね、手の込んだ売春みたいなこと、サービス業。でも、本当にいい子で、大学の頃は今、私の住んでいる部屋に2人で住んでいたの。もう、最高だった。楽しくって仕方なかった。何もこわいことなんかなくて、2人で毎日いろんなことしゃべったり、徹夜し

たり、ぐでんぐでんに酔っぱらったりね。外でいやなことがあっても、部屋に帰って大騒ぎして冗談にして忘れちゃうの。楽しかったなあ。あなたとのこともよく相談したのよ。相談って言ってもほら、悪口とか言ったり、のろけてみたり、お互いにそんなことばっかりだったけど。ほら、わかるでしょう、男の人と女の人って、絶対に友達になれないじゃない？　本当に気安くなった時ってもう、恋じゃないじゃない、そういうんじゃなくて、しおりとはね、本当に仲良しだった。しおりといると、上手く言えないけど、人生の重みがずっしり来る時に、それが半分になるの。気持ちが楽になってね、別に何をしてくれるわけでもないのに、いくら気を許し合ってもべたっとこなくてね、ちょうど良く優しい感じでね。女友達っていいわよね。あなたがいて、しおりがいて、あの頃はいつも悩んでばっかりいたけど、そんなの子供の遊びみたいなもので、今思うとお祭りみたい。毎日、泣いたり笑ったりしていた。そう、しおりって本当にいい子で、人の話をうん、うんってうなずいて聞くときにいつも少し、口元を微笑ませていたわ。そしてえくぼができるの。でも、しおりは自殺しちゃったの。もうとっくに私のところを出てひとりで豪華な部屋に住んでいたんだけど、睡眠薬をたくさん飲んで、その部屋

の小さなシングルベッドの中で死んでしまった。……あの子は、仕事用の部屋にものすごく大きな、それこそ中世の貴族が眠っちゃうようなふかふかの、天蓋つきのベッドを持っていたくせにどうしてそっちで死ななかったのかしらね。友達でもそういうことは、わからないものね。どうせなら、そっちの方が、天国に行けそうだもんねえって、しおりなら言いそうなんだけれど。私は、田舎から飛んで出てきたしおりのお母さんからの電話でしおりの死を知った。初めてお会いしたんだけど、しおりによく似ていて、胸がいっぱいになってしまって、しおりのしていた仕事のことを聞かれたんだけど、ついに答えられなかった。

やっぱりうまく言えそうもない。思いを伝えようとすればするほど私の言葉は粉になり、前のめりの勢いに乗って風に消えていってしまうのがわかるので口に出さない。この言い方では何ひとつ伝わらない。結局正しいのは、友達が死んだの、というところだけだ。いったい、どう言い表せばこの淋しさを伝えることができるのか……。

そう思いながら、夏近い夜空の下を歩く。駅前の大きな歩道橋を渡りながら彼は言

う。

「明日は午後に仕事に出ればいいんだ。」

車の列はずらりと光って、遠いカーブを曲がってゆく。いきなり夜が無限に永くなったように思えて、私は嬉しくなる。しおりのことなんて忘れてしまう。

「じゃあ、泊まっていきましょう。」

はしゃいで手を取り私が言うと、彼はいつもの少し笑った横顔で、

「そうだね。」

と言う。私は幸福になる。夜が好きだ。好きでたまらない。夜の中では何もかもが可能になるように思えて、私はちっとも眠くならない。

彼といると時折、「夜の果て」を見てしまうことがあった。私にとってそれは、これまでに見たことのない光景だった。

最中のことではない。最中にはただ2人の間には何のすき間もなく、心がさまようこともない。彼はセックスの最中に何もしゃべらない人なので、あんまりそうなので、私

はよくふざけていろいろなことを言わせようとするけれど、本当は黙っていることがとても好きだった。何だか彼を通して巨大な夜と寝ているような気がする。言葉がないぶん、彼本人よりももっと深いところにある本当の彼を丸ごと抱いているような気がする。もう寝ようか、と体を離すときまで、何ひとつ考えなくていい。目を閉じて、本当の彼のことだけ感じていればいい。

それは夜更けのことだ。

そこが大きなホテルであっても、駅の裏にあるような安宿でも変わりはない。真夜中に、何だか雨や風の音が聞こえる気がして、ふと目が覚める。

そうするとどうしても外が見たくなって、私は窓を開ける。熱気のこもった部屋にしんと冷たい風が入って来て、星がまたたいているのが見える。あるいは、しとしとと雨が降りはじめている。

しばらくそれを眺めながら、ふととなりを見ると眠っているとばかり思っていた彼がぱっちり目を開けている。私はなぜか言葉を失くして、黙ってその目をのぞきこむ。横たわった姿勢のままで外が見えないはずなのに、彼は窓の外の音や景色が映っているよ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo